

Margaret Drabble の女性観

— *Jerusalem the Golden* を中心として —

八 幡 雅 彦

現代イギリス女流小説家, Margaret Drabble (1939—)の作品は, 代表作 *The Millstone* (1965) に関しては, Virginia K. Beards が, 「この小説は著者のフェミニスト意識の成長を示唆している。」“The novel suggests a growth in the author's feminist consciousness,”⁽¹⁾ と述べているように, 学問, 観念の世界に閉じ込もっていたひとりの女性が, 妊娠, 出産という経験を通じて, 現実世界に対して目が開かれ, 自立, 成長してゆく姿を描いたものであるというふうに, そしてまた *Jerusalem the Golden* (1967) に関しては, Lee R. Edwards が, 「この小説の最後の数行は, Clara が生きのびることを予告している。意志と力に満ちた, この最後の数行は, 文脈からして, 冷酷なというよりは断固たるものである。というのは, *Jerusalem the Golden* における勝利, すなわち, たぶん, Clara のというよりは Margaret Drabble の勝利は, 主人公の野望とその周囲の世界両方を共有するのに十分なだけの一形態を勝ち誇って発見することだからである。」“The novel's final lines herald Clara's survival. Full of will and power, they are, in context, determined more than grim. For the triumph in *Jerusalem the Golden*, Margaret Drabble's perhaps even more than Clara's, is the victorious discovery of a form adequate to contain both the hero's aspirations and the surrounding world.”⁽²⁾ と述べているように, もっと分かりやすく言うならば, 小野寺健氏が, 「これは思春期から成年期へかけての, 一人の若い女性の自己解放の, 自立の, そこにいたる燦然たる人生の軌跡である。」⁽³⁾ と指摘するように, これらヒロインたちの生き方に対しては, 一般的には, 肯定的な解釈がなされているように思うのだが, 果たして一概にそう解釈することができるだろうか。

Jerusalem the Golden という作品は, イギリス北部の田舎町 Northam (架空の町, Drabble の故郷 Sheffield のことと思われる) で生まれたヒロイン Clara Maugham が, 「瘦せた土地のイメージそのもの」“the very image of unfertile ground”⁽⁴⁾ という故郷の保守性, 閉鎖性と, 「血も涙もないサディスティックな偽善者」“a bloody-minded sadistic old hypocrite”⁽⁵⁾ であり, Drabble 自身にいわせれば, 「不愉快で, 冷酷で, 辛らつで, 人生を否定している」“unpleasant, hard, bitter, life-denying”⁽⁶⁾ 母親のゆがんだ性格に嫌気がさし, 奨学金

を得てLondon University に入学し、故郷を離れ、そして London で Denham 一家と知り合いになり、Clara は、その、今だかつて訪れたこともない自由で解放的な世界に魅せられ、一家の3番目の子供で、すでに結婚している Gabriel と恋に陥り、ふたりで Paris へ出かけてアヴァンチュールを楽しんだあげく、彼女は、彼を置いてきぼりにしてイギリスへひとりで帰り、そんな時、「母危篤」の電報を受けた彼女は故郷 Northam へ飛んで帰るが、結局は、母と故郷を捨てて、London で暮らすことを決意するという物語である。

“Jerusalem the Golden” というのは、もともと、次の、J. M. Neale の讃美歌の一節のうちに出てくる文句である。

Jerusalem the Golden	黄金のイエルサレム
With milk and honey blest	ミルクと蜜に恵まれし都よ
Beneath thy contemplation	汝を思えば
Sink heart and voice oppressed	心沈み、声もなし。
I know not, oh, I know not	われは知らず、おお、われは知らず
What social joys are there	いかなるこの世の歓びの
What radiancy of glory	いかなる栄光の輝きの
What light beyond compare. (7)	たぐいなきいかなる光の 汝に充てるやを。

(小野寺 健 訳)

これは、Clara が、故郷 Northam の Battersby Grammar School へ通っていた頃、彼女を、「夢中のそして激しいばかりの野心と希望の状態」“a state of rapt and ferocious ambition and desire”⁽⁸⁾にまで間違いなく高めてくれる讃美歌の一節としてもっとも好んだものだった。

この作品の中で、“Jerusalem the Golden” という世界を象徴しているものは、大きくいて、ふたつある。まず、ひとつは Clara が London へ出て知り合いになった Denham 一家の「豊かな小世界、果しない榮譽と名声の世界、すでに過去のものとなった、彼女には参加することのできなくなった世界」“a small rich world, a world of endless celebration and fame, and a world that was gone and past sharing”⁽⁹⁾であり、そしてもうひとつは、物語の最後で、癌で死んでゆくであろう母親と故郷 Northam を捨てて、Clara が旅立とうとしている London という「輝く星のようにびっしりと人々の生きている明るい世界、終ることもなく、別れることもなく、永久にどこまでも拡がり、たえず出会いをくり返して行く世界」“a bright and peopled world thick with starry inhabitants, where there was no ending, no parting, but an eternal vast incessant rearrangement”⁽¹⁰⁾であり、ともに、Clara にとっては、自己解放という願望をかなえてくれると思われる世界である。この意味からすれば、彼女が、Northam の Grammar School 時代に、学校の旅行で出かけて、男の子とアヴァンチュールを楽しむ、そしてまた、London University 入学後知り合った Denham 一家の Gabriel と供に出かけてアヴァンチュールを楽しむ、Paris という世界も“Jerusalem the Golden”なのかもしれない。

Claraは、物語の最後で、「彼女の母は死のうとしていた、しかし彼女は負けない、母の死がもたらす罪悪感にも、解放感にも、悲しみにも。彼女は生きてみせる、自分で生きることを決意したのだから、彼女には死への希求などありはしないのだから。運命のどんな恵みにも、好意にも、彼女はそんなものとはかかわりなく生きぬいてみせる、運命になどつかまるものか、ぜったいつかまえさせはしないのだ。」“Her mother was dying, but she herself would survive it, she would survive even the guilt and convenience and grief of her mother's death, she would survive because she had willed herself to survive, because she did not have it in her to die. Even the mercy and kindness of destiny she would survive; they would not get her that way, they would not get her at all.”⁽¹¹⁾ という強い決意を述べている。これに関しては、対立するふたつの解釈がある。小野寺健氏は、これこそがこの作品の主題であり、これは、「思春期から成年期へかけての、1人の若い女性の自己解放の、自立の、そこにいたる燦然たる人生の軌跡」を描いた物語であると述べている。一方、Ellen Cronan Roseは、「Londonへ戻るために母を捨てることによって、Claraは、真の自由の可能性を、創造的に行動する能力を放棄する。この小説を締めくくる彼女の独立宣言は、彼女自らが創り出した運命に彼女がどれほど完全に囚われているかを反語的に表現しているものである。」“Abandoning her mother to return to London, Clara gives up the possibility of true freedom, the ability to act creatively. Her declaration of independence, which concludes the novel, is an ironic revelation of how securely she is a prisoner of the fate she has created for herself:…”⁽¹²⁾ と述べている。さらに、彼女は、別のところでClaraのことを“a prisoner of her own will”⁽¹³⁾ と表現し、かなり否定的な見解を示しているが、Susanna Roxmanは、E. C. Roseのこの表現を、「巧みなパラドックスとして正当性が認められるか、でなければほとんど矛盾したものとして拒絶される句」“a phrase which may be defended as a subtle paradox, or else rejected”⁽¹⁴⁾ と述べ、さらにE. C. Roseに対する批判を次のように続け、Claraの「意志と力」の強さを主張する。

This (“Her mother was dying, but she herself would survive it/.../ Even the mercy and kindness of destiny she would survive”) may mean that the privileges she has at last attained – of course, as she thinks, by the agency of “destiny” – will not after all have any negative by-effects. In opposition to Ellen Cronan Rose, I do not believe that the words quoted should be read ironically; I rather agree with Lee R. Edwards who asserts that “The novel's final lines herald Clara's survival. Full of will and power, they are”.⁽¹⁵⁾

果たして、Claraは、小野寺氏やS.Roxmanが主張するように、「黄金のイエルサレム」という自由解放の世界に到達し得たのだろうか、それとも、E.C.Roseが主張するように、し得なかったのだろうか。

E.C.Roseは、彼女の見解の根拠として、Drabbleが、1974年にその伝記を出版するまでに大きな影響を受けたArnold Bennettの*A Man from the North*(1898)、*Clayhanger*(1910)、

Hilda Lessways (1911) という3つの作品と、*Jerusalem the Golden*のプロットの類似性を上げている。これらの3つの作品の主人公たち (Richard Larch, Edwin Clayhanger, Hilda Lessways) が、「遺伝と環境によって決定づけられた運命」“the fate determined for them by their heredity and environment”⁽¹⁶⁾から逃がられられないように、「われわれは自分たちの過去から自由にはなれない。われわれは他人の要求から決して自由になれない。そしてわれわれはそういった自由を求めてはならない。」“We are not free from our past, we are never free of the claims of others, and we ought not to wish to be.”⁽¹⁷⁾というのが、Drabbleがもっとも賞讃する Arnold Bennett の小説のうちから読み取った教訓であると E.C. Rose は述べている。

そこで、彼女が主張するように、Clara が “a prisoner of the fate” であるという根拠を作品の中から探ってみると、次のような事が上げられる。

Clara は、London University から休暇で Northam に帰省する度に、「自分が Northam を永久に去ることができるなどとは思えなかった。自分にそのような自由が与えられているとは思えなかった。」“... she did not see that she could leave Northam forever. She felt herself restrained from such freedom.”⁽¹⁸⁾と感じ、さらに、彼女の、故郷に対する嫌悪と恐怖は次のように描かれている。

...she doubted her power to escape; even after two years in London, she still thought that her brain might go or that her nerve might snap, and that she would be compelled to return, feebly, defeated, to her mother's house.⁽¹⁹⁾

そして、22歳の時、Denham 一家と知り合って、その自由解放の世界に魅せられると同時に、彼女は、「毎日味わっているみじめな孤独感の脅威をどうしても払いのけることができず、すでに永久にこの脅威を払いのけられないのではないか。」“She had never managed to dispel the everyday threat and terror of contemptible solitude, and was beginning to see now that it would never be dispelled;”⁽²⁰⁾と思うようになり、さらには、「自分にはいつになっても気楽に人とつきあうということはできないだろう、Northam 時代の気が狂うような孤独感、永久に消えないだろう。」“She would never be able to take society lightly, and the frantic loneliness of Northam would never leave her.”⁽²¹⁾と感じるのだった。また Gabriel の両親の家で、彼と、親が子に与える影響について論じ合いながら、「完全に別れるなどということはありえない、親子の関係は死ぬまで続くもので、どんなにそういう考えがばかばかしい、くだらないものに見えてもやはり血は血なのだし、この事実はそれを否定するような鈍感なまねをするより、かえって謙虚に認めた方が気がきいている。」“that there is no such thing as severance, that connexions endure till death, that blood is after all blood, however fanciful and frivolous such a notion might seem; and that a humble acceptance of this was more elegant than a blunt denial”⁽²²⁾と Clara は、口には出し

て言わないが、心の中で思うのだった。

その後、彼女は、Gabriel と Paris へ出かけて、ホテルのベッドの中で抱き合ったまま、そしてベッドの足下の壁に掛かった、彼らを冷ややかに見おろす、瘦せた顔をした女の油絵を目にして、「わたしは追跡されているのよ、追いかけてられているの、いくら逃げても逃げきれないんだわ、りんごの実は、木からそう遠くないところに落ちるわけにはいかないのよ」“I am chased, I am pursued, I run and run, but I will never get away, the apple does not fall far from the tree,”⁽²³⁾ という発言を Gabriel に対してする。これは、Clara が、油絵の女から自分の母親を連想して、自分は決して母親から逃がられない運命にあるということを隠喩的に表現したものだと考えられないだろうか。

そして、彼女は、Gabriel を置いてきぼりにして、ひとりで London へ戻った時、「母危篤」の電報を受け取って、故郷 Northam へ飛んで帰る。家へ着いた彼女は、母親の寝室に入って、化粧台の引き出しをひっかき回しているうちに、母親の昔の練習帳を見つけ出し、その中に次のような詩の文句を発見する。

O let us seek a brighter world
Where darkness plays no part:⁽²⁴⁾

さらには、別のページの冒頭に次のような詩も発見するのだった。

I wait here for my life, and here I must wait
While all the world rolls on and passes by;
Surely my expectations have a date,
And I will find the answer ere I die?⁽²⁵⁾

かくして、Clara は、母もかつては、Northam から抜け出して明るく希望に満ちた自由解放の世界へ羽ばたくことを夢見ていた乙女であったにもかかわらず、その夢は実現せず、Northam へ骨を埋めるしかなかったのだということを知って、身を震わせて泣き始め、「悲劇は存在するのだ。かならずしも生きのびられるとは限らないのだ。かならず逃げられる保障のある人間などいはいないのだ。」“... tragedy was possible, survival was no certainty, there was no reason why anyone should escape.”⁽²⁶⁾ と感じるのだった。そして、翌朝、病院で、死の床にある母親と対面した Clara は、母親の沈み切った抑揚のない問いかけにすっかりうろたえてしまい、「自由などはどこかへいっていた。自由などは情ない寝言でしかなかった。」“Freedom abandoned her, the pitiful ineptitude of freedom,”⁽²⁷⁾ と感じ、さらには、彼女をドライブに誘い出そうとする Gabriel に対しては、彼女の Northam の家まで来たら目をつぶって欲しいと懇願するのだった。なぜなら、彼女は、彼女の家から自由になることはできないと思うからであり、「この家は一生わたしについてまわるわ。自分以外の人までついてまわらせたくはないの。わたしは自由には

なれないわ、……」“It (This house) is a part of me forever, I don't want it to be a part of anyone else. I can't be free,…”⁽²⁸⁾と、彼女はGabrielに言うのだった。

以上のように、Claraは故郷Northamと母親から離れられない運命にあるということをほのめかすような描写が作品中の随所に見られ、これらが、Claraは“a prisoner of the fate”であるというE.C.Roseの説の裏づけになるということが考えられる。と同時に、彼女が、「運命というのは、Margaret Drabbleの小説に浸透している言葉であり、概念である。」“Fate is a word and a concept which pervades Margaret Drabble's fiction.”⁽²⁹⁾と指摘するように、Marion Vlastos Libbyが、「Drabbleの小説の主題は、運命論と意志の問題に対する、彼女の強烈な関心である。」“... the primary theme in Drabble's fiction is her intense preoccupation with questions of fatalism and will,”⁽³⁰⁾と指摘するように、また、Mary Hurley Moranが、「Margaret Drabbleの小説は、人間の自由意志をほとんど許さない超自然の力によって支配された、荒涼たる、しばしば威嚇するような世界を描いている。」“Margaret Drabble's novels portray a bleak, often menacing universe, governed by a harsh supernatural force that allows human beings very little free will.”⁽³¹⁾と指摘するように、そしてまた、Drabble自身が、Nancy S. Hardinとのインタビューで語っているように、Drabbleは「運命」ということに強い関心を示しており、⁽³²⁾ *Jerusalem the Golden* 以外の作品においても運命を背負ったヒロインたちを描き続けている。こういうことから、Claraが“a prisoner of the fate”であるという可能性が出てきはしないだろうか。

この、運命を背負ったヒロインたちの代表として上げられるのが、*Jerusalem the Golden*の次の作品である *The Waterfall* (1969)のヒロイン、Jane Grayで、彼女は作品の冒頭で、「たとえ溺れかけていたとしても、助かるため手ひとつのばす気にもなれないだろう、わたしはそれほど運命にさからうのがいやになっていた。」“If I were drowning I couldn't reach out a hand to save myself, so unwilling am I to set myself up against fate.”⁽³³⁾と述べている。彼女は、Malcomとの結婚に関しては、「彼が私を好んだのは生まれた時から定められた宿命だった。」“that he like me had been marked from birth for such a fate;”⁽³⁴⁾と自分に言い聞かせようとし、彼との結婚によって突然、怠惰の中に転落した彼女はJamesとの浮気に走るが、それを彼女は、避けえないものだったとみなし、「それはひとつの奇蹟で、おどろくべき運命の一撃だった。」“... it was a miracle, it was a stroke of amazing fate.”⁽³⁵⁾と感ずる。そして、彼女は、子供ふたりを連れて、Jamesの運転する車でノルウェーに出かけた時、途中で交通事故に出会うが、衝突の瞬間に神から個人的なメッセージをもらったというようなことを後で言っている。

このように、彼女は、結婚、浮気、交通事故といった一連の出来事をすべて運命によって決定づけられたものとみなし、運命に逆らって生きようとする *Jerusalem the Golden*のヒロイン、Claraとは対照的に、運命をすべて受動的に受け入れている。

処女作、*A Summer Bird-Cage* (1963)のヒロイン、Sarah Bennettは、常に、姉のLouiseに冷たくあしらわれ、利用されるだけ利用されてきたにもかかわらず、姉が、浮気がバレて、彼女の

夫の家から追い出され、Sarahの家へ身をかくまって欲しいと電話して来た時、それを承諾する。この時、SarahはボーイフレンドのJackieと次のような会話を交わして、姉を受け入れることを承諾した理由を述べている。

(Jackie:) 'But you let her come just the same.'

(Sarah:) 'I didn't want to.'

(Jackie:) 'Then why did you?'

(Sarah:) 'Because she — because blood is thicker than water, I suppose.'⁽³⁶⁾

「血は水よりも濃い」——これは、*Jerusalem the Golden*のClaraが、Gabrielと、親が子に与える影響について論じ合いながら、「完全に別れるなどということはありません、親子の関係は死ぬまで続くもので……やはり血は血なのだ、この事実は……かえって謙虚に認めた方が気がきいている。」と心の中で感じたことを思い起こさせるものであり、Clara同様、Sarahも、血のつながりのある者同志は別れることができないという運命観を持っているのだろうか。Drabbleの他の作品における、こういった、運命を背負ったヒロインたちに接することによって、Claraの力強い、運命からの独立宣言が、E.C.Roseが指摘するように、実は、彼女が運命に完全に囚われていることを反語的に表現しているものだと解釈が成り立つということも考えられるのではないだろうか。

もうひとつ、Claraが、「黄金のイエルサレム」という自己解放の世界に達し得ないのではないかと考えられることの大きな理由として、彼女をも含めて、Drabbleの描くヒロインたちは、一方では自己解放を旨とする勇敢な女性たちでありながら、他方では臆病で、感情的で、精神的に非常に不安定で、迷いの状態にあるということが上げられる。

たとえば、Claraは、NorthamのBattersby Grammar Schoolへ通っていた頃、ある男の子にふられて1日中泣き通したり、学校の旅行でParisへ行った時、イタリアの男の子とちょっとしたアヴェンチュールを楽しみ、彼と別れた後、メトロの駅に向かって駆け出しながら、彼女は人生最大の喜びに満たされ、自分が生きていることを実感し、「その夜の密度の高い複雑な経験は、それまでみだされたことのなかった、彼女の心の片隅をみたしてくれた。」“... the thick complexity of what had happened satisfied something in her that had never before satisfaction.”⁽³⁷⁾と感じ、宿舎へ帰って、仲間の女子生徒たちに自慢気にその晩の出来事を話すがひとりベッドの中に入ってから、彼女は、怖さからか、ほんとうはもっと付き合うべきだったのだという気持ちからか、それとも恥ずかしさからか、身震いが止まらなくなるのだった。その描写は次のとおりである。

But later that night, lying awake in bed, Clara found herself trembling, partly from fright, and partly from the knowledge that perhaps she ought to have gone. ... She lay there, and her knees were trembling, but whether

it was from running from the Métro, from past terror, or from shame,
she could not tell. (38)

そして、London 大学入学後、Denham 一家と知り合った彼女は、Gabriel の愛人として、彼と一緒に Paris へ旅行し、ホテルのベッドで読書しながら多量のジンを飲み、風呂場で激しく嘔吐するのだが、飲むのを止めてくれなかったのはあなたのせいよ、と Gabriel を非難するのだった。さらに、ある酒の席で、Gabriel が、彼女に断りもせず、ひとりで先に帰ってしまった時、彼女はタクシーの中で、ホテルに着くまで泣き通すのだった。そして、ホテルに戻って、Gabriel の寝姿を見た彼女は、ふたりの仲はもう終わりだと判断し、今度は逆に彼を置いてきぼりにして London へ帰ってしまうのである。このように、Clara は精神的に非常に不安定で、感情的な行動に走りがちだ。

彼女の臆病さ、迷いを示すものとしては、死の床にある母と対面した時、すっかりうろたえてしまい、自由などは情ない寝言でしかなかったと感ずること、物語の最後で、Gabriel にドライブの誘いを受けた時、自分の Nartham の家を見せるのを嫌がって、彼に臆病者呼ばわりされたことなどが上げられる。後の例の描写は次の通りだ。

‘... But you must remember to shut your eyes when you get to this house,
I don’t want you to remember it, I don’t want it in your memory.’

‘You’re a coward,’ he said. ‘Why can’t I know the worst?’ (39)

そして、この作品のひとつ前の作品で、Drabble の代表作である *The Millstone* のヒロイン、Rosamund Stacy は、作品の冒頭で、「私の今までの人生は、いつも自信と臆病が奇妙に混ぜ合わさっていたのが特徴だった。ほとんど、その混ぜ合わせによって形作られてきたと言っていいかもしれない。」 “My career has always been marked by a strange mixture of confidence and cowardice: almost, one might say, made by it.” (40) と述べている通り、彼女もまた精神的に非常に不安定な女性である。まず、彼女の臆病さを示すものとして、彼女が19歳の時のボーイフレンド、Hamish との交際が上げられる。彼女は、彼と一緒にホテルへ入っても、決してセックスに至ることはなく、そういう交際を1年間続けたわけだが、彼女はセックスに対する恐怖を次のように述べている。

My crime was my suspicion, my fear, my apprehensive terror of the very idea of sex. I liked men, and was forever in and out of love for years, but the thought of sex frightened the life out of me, and the more I didn’t do it and the more I read and heard about how I ought to do it the more frightened I became. It must have been the physical thing itself that frightened me, for I did not at all object to its social implications, to my name on hotel registers, my name bandied about at parties, nor to the

emotional upheavals which I imagined to be its companions: but the act itself I could neither make nor contemplate.⁽⁴¹⁾

しかし、彼女は、次のボーイフレンド、George とのたった1回きりの肉体関係で妊娠してしまい、そして女の赤ちゃんを出産するが、彼女は、George に、彼が父親であることを決して打ち明けようとしないう。果たして、これをどう解釈すればいいのだろうか。一般的に解釈されているように、Rosamund は、男性に頼らず、自分だけの力で赤ちゃんを育ててゆこうとする勇敢な女性と言えるのだろうか。赤ちゃんを生むことによって、それまで彼女が閉じ込もっていた学問、観念の世界という殻を打ち破って、現実世界と交渉を持つことにより、彼女は女性として成長を遂げたと言えるのだろうか。Virginia K. Beards が主張するように、この小説は、Drabble のフェミニスト意識の成長を示しているものなのだろうか。

Rosamund は、George と肉体関係を結んだその夜、彼が帰った後、ベッドの中で、彼はただ単に彼女をもて遊んだだけではないのかという疑惑と不安にさいなまれ始め、絶望的な気持ちに陥る。そして彼からの電話を期待し続けるが、1週間たってもかかってくず、その期待を捨て、彼に会うのは容易なことだけれども、それはプライドが許さない、彼が会いたくないのなら、こっちだって会いたくはない、というような意地を張って、彼がいそうな場所には決して足を踏み入れようとはしない。ここらあたりは、Northam の Battersby Grammar School へ通っていた頃、ある男の子にふられて1日中泣き通したり、Paris へ旅行して、イタリアの男の子とアヴァンチュールを楽しんだ後、宿舎へ戻って来てベッドの中でガタガタ震え出した、*Jerusalem the Golden* のヒロイン、Clara Maugham と類似の精神的な不安定さ、さらに言うならば、こっけいささえうかがえる。

そして、妊娠を知った際、Rosamund は今度こそ George に会わざるを得ないと思うが、午後になると、彼女は、やはりすべてを自分ひとりの胸に秘めておかなくてはならないと気が変わるのだった。その後も、ジンを飲んで酔っ払った彼女は、すっかり陽気になって、George に電話をかけて打ち明けようという気持ちになるが、禁欲の罨にかかかってしまって、その誘惑を乗り込めたという。このように、Rosamund は次から次へと気持ちが変わってゆくのである。

しかし、そうやって George を避けていた彼女も、Octavia という名の女の赤ちゃんを出産後、薬屋に立ち寄った際、偶然彼に会うハメになる。その時の彼女の反応は次の通りだ。

For so long now I had not seen him that I was bereft of all power, so great was my amazement, so many my thoughts, so troubled my heart. I sat there, dumb, and looked at him, and my mouth smiled, for I was terrified that he would go once more and leave me, that he was on his way elsewhere, that he would not wish to stop. I wanted to detain him: I wanted to say, stay with me, but my mouth was so dry I could not speak.⁽⁴²⁾

一読すれば、とてもとてもフェミニズムを代表するような女性とは思えないほどの気の動転ぶり、

あわてふためきぶり、狼狽ぶりであるが、彼女同様の状況に置かれれば、たとえどんなに精神的に強い女性でも、これに近い反応を示すということは考えられるので、これが、彼女の臆病さ、精神的な不安定さを示すものとは一概には言えないだろうが、その一端を示しているものかもしれない。

そして、彼女は George を彼女の家に招き、彼に赤ちゃんを見せるが、彼は、まるで他人の子供であるかのように、彼は自分がその子の父親であることを知らないで、それも当然なことだが、「かわいらしい子だねえ。」“‘She’s beautiful,’”⁽⁴³⁾と言い、それに対して Rosamund も、まるで彼の他に父親がいるかのように、「そうですね。」“‘Yes, isn’t she?’”⁽⁴⁴⁾と答えるだけだった。このやりとりによって、自分と George との間の絶望的な距離“hopeless distance”⁽⁴⁵⁾を知った彼女は、とうとう真実を打ち明けず彼と別れてしまうのである。

この、悲観的とも言える別れの描写を読んだ時、確かに結果的には Rosamund は男に頼らず、自分だけの力で赤ちゃんを育ててゆこうと決意したわけだが、必ずしもそれは力強い決意とは言えないような気がするし、そして、臆病であり、精神的に不安定であるという彼女の性格の一面に接した時、必ずしも彼女はフェミニズムを代表するような力強い女性として描かれているのではないような気がする。したがって、確かに、彼女は、妊娠、出産という体験を通じて、それまで閉じ込めていた学問、観念の世界という殻を打ち破って、現実世界に対して目が開かれてゆくわけだがそれによって成長したのだとは必ずしも言い切れないような気がする。

Ellen Cronan Rose は、Rosamund の生き方に対しても、一般的な解釈に逆らって、否定的な見解を示している。彼女は、Rosamund は Octavia を出産して母親になっても決して現実に対して目が開かれることはないという旨のことを次のように述べている。

If becoming a mother were a significant development in Rosamund’s life, it would affect her relationship not only with Octavia, but with people in general. There is no sign, however, that Rosamund is significantly nearer the possibility of true intimacy at the end of *The Millstone* than she is at the beginning of the novel.⁽⁴⁶⁾

彼女は、Rosamund が George に真実を告げないまま別れてしまうのは、彼女が「他人との親密な関係」“communication”や、「親しい交わり」“communion”や、「愛」“love”をあきらめたのを示すということと⁽⁴⁷⁾ Rosamund は自分自身の延長“an extension of herself”としてしか Octavia を愛さない⁽⁴⁸⁾ということをそれらの理由のうちに上げている。さらに彼女は、Rosamund は決してフェミニストのヒロインではなく、「Rosamund の独立心や、能力や、自信は、肯定的な性質のものではなく、彼女の存在のよろさ、そして他人の必要性、さらに他人に対する責任感といったものを認識することを回避する企てだ。」“Rosamund’s independence, competence, and self-reliance are not positive attributes, but attempts to avoid acknowledging her existential vulnerability, her need for other people and her responsibilities to them.”⁽⁴⁹⁾とさえ述べている。

Margaret Drabble は、「運命」ということに強い関心を示しており、彼女の描くヒロインたちは、*Jerusalem the Golden* の Clara Maugham にしろ、*The Waterfall* の Jane Gray にしろ、運命に束縛されていることを示す言動を随所に見せているということから、そして Clara にしろ、Rosamund Stacy にしろ、Drabble のヒロインたちは、臆病で、感情的で、精神的には非常に不安定で、迷いの状態にあるということから、彼女たちは、フェミニズムを代表するような、自己解放の世界に到達し得る力を持った「強い女」とは一概には言い切れないのではないか、ということを書き手はここまで述べてきた。ここまでで分かるように、Ellen Cronan Rose という女性批評家は、Drabble のヒロインたちの生き方に対しては、かなり否定的な、悲観的な見解を示しているわけだが、そして書き手は、一般の見解とは 180 度違うような彼女のこのユニークな見解に着目し彼女の見解の正当性を探ってきたわけだが、書き手は彼女の見解を全面的に支持しているというわけでは決してない。

やはり、Drabble のヒロインたちに対しては、一般的に言われているような勇敢さ、大胆さもまた認めないわけにはゆかない。Clara にしろ、Rosamund にしろ、因襲や、宗教や、階級意識や、スノビズムに根ざした親たちの価値感に強く反発し、未知の世界に身を投ずることによって、すなわち Clara の場合、London という自由世界に、Rosamund の場合、妊娠、出産という新しい経験の世界に身を投ずることによって、自分たちの力で、自分たちなりの価値感、自分たちなりの充実した生き方を、試行錯誤の繰り返しによって見つけ出そうとしており、それが成功するか失敗するかは別として、それをやり遂げようとする彼女たちの意志力に、書き手は、勇敢さ、大胆さを感じないわけにはゆかない。すなわち、Clara の場合、「黄金のイエルサレム」という自己解放の世界に到達できるか否かは別として、到達しようとする彼女の意志力には勇敢さ、大胆さを感じないわけにはゆかないのである。

Drabble のヒロインたちの、一方では自己解放を目ざして勇敢に戦いながらも、他方では臆病になり、感情的になり、思い迷う姿は、Drabble 自身の不安定な女性観を象徴しているような気がしてならない。彼女は、1980 年 11 月、日本へ招かれて、関西の 5 大学と英国文化センターで、英国女流小説の伝統に関する講演を行なった。そのうちの、11 月 13 日に帝塚山学院大学で行った、‘The Tradition of Women’s Fiction: Jane Austen to Doris Lessing’⁽⁵⁰⁾ と題する講演の中で、彼女自身のことばによっても彼女の不安定な女性観が示されていると思われる。彼女は、「今、私は私自身、未来を確信しております。女性が永久に苦しむ必要など何ひとつないと確信しております。私は、私たちの作品を通じて、今以上の男女平等と、したがって今以上の男女の幸福が訪れる、なんらかの種類により良き未来を創造できると信じております。」“Now I myself believe very strongly in the future and believe very strongly that there is no need for women to suffer endlessly. I believe that through our work we can create some kind of better future where there is more equality and more happiness, therefore, for both sexes.”⁽⁵¹⁾ といったんは言いながらも、後の方になって、「私は、今年（1980 年）発表したばかりの *The Middle Ground* という小説の中で、私はこの小説を完全な疑問符で終わらせています。この作品を発表する時までには、私は、成功を修めた女性、気落ちした女性、陽気な女性、

実在の女性、小説上の女性といった問題に関してすっかり頭が混乱しておりましたので、私は、*The Middle Ground* の結末で、登場人物(Kate Armstrong) にパーティを開かせようとしたまま、しかし未来はどうなるのか不確かなままにしたのです。これこそが、一形式としての小説、一形式としての女流小説に関する、そして女性の未来に関する、まさに私自身の感情なのです。女性の未来はどうなるのかと私は尋ねられることがあります。私は、答えることができればいいのだが、と思います。」 “In the novel which I have just published this year, which is called *The Middle Ground*, I end the novel on a complete question mark. By this time I was so confused about the problem of successful women, depressed women, cheerful women, women in real life, women in fiction that I left my character at the end of *The Middle Ground* about to give a party but uncertain what the future holds. This is very much my own feeling both about the novel as a form, the woman's novel as a form, and about the future of women. People ask me what is the future of women. I wish I could answer.”⁽⁵²⁾とっているのである。つまり、最初のうちは、女性の未来は明るいという旨のことを言いながらも、後では、女性の未来はどうなるのかわからないという、一見矛盾した発言をしており、この矛盾には Drabble 自身、気がついていないと思うのだが、これが、女性の未来に対する Drabble の希望と不安、すなわち彼女の不安定な、不確かな女性観を言い表わしているものではないだろうか。*The Middle Ground* のヒロイン、Kate Armstrong の作品の結末における次の発言は、確かに、Drabble の不確かな女性の未来観を集約しているように思える。

Anything is possible, it is all undecided. Everything or nothing. It is all in the future. Excitement fills her, excitement, joy, anticipation, apprehension. Something will happen. The water glints in the distance. It is unplanned, unpredicted. Nothing binds her, nothing holds her. It is the unknown, and there is no way of stopping it. It waits, unseen, and she will meet it, it will meet her. There is no way of knowing what it will be. It does not know itself. But it will come into being.⁽⁵³⁾

「何かが可能だ、それはまだまったくはっきりしないけれども。すべてか無かのどちらかだ。それはすべて未来にかかっている。」——これは、*Jerusalem the Golden* のヒロイン、Clara Maugham の未来についても言えることではないだろうか。彼女は、Northam を捨てて London に住むのを決意することによって、これで完全に自己解放を成し遂げたとは言えず、かといって、E. C. Rose が指摘するように、彼女は “a prisoner of the fate” として自己解放には絶対至らないとも言切れないだろう。事実、Drabble 自身も、Clara の未来について、「彼女は何か恐ろしいものになると私は思います。私は、彼女の未来がいくぶん恐ろしいのです。」 “She's going to turn into something fearsome, I think. I rather dread her future.”⁽⁵⁴⁾と語って

いる。Drabbleが「恐ろしい」ということばにどういう意味を込めて語っているのか、この場合、定かでないが、いずれにせよ、Claraの未来はどうなるのか、彼女の行く手には何が待ち受けているのか、この小説が終わった時点ではまだ分からないということだろう。Claraの未来が不確かだということは、Drabbleの次の発言によってさらにはっきりする。

What I can't stand about some novelists is the way they seem to imply that there's a fixed and finished truth that their characters reach at the end of the book. There's no end to learning. You're bound to learn more. What you know at each point of your life is relevant to you then, yet isn't quite enough, because you've got to go on learning.⁽⁵⁹⁾

「学ぶことに終わりはない。人間は学び続けなければならない。」——したがってClaraも学び続けなければならない。Claraは、Londonという新しい世界の中で、未知の未来の中で、多くのものを学びながら、自己解放を目ざして、今後とも試行錯誤を繰り返してゆくことだろう。

注

- (1) Virginia K. Beards, "Margaret Drabble: Novels of a Cautious Feminist", *Critique*, Vol. 15, No. 1 (1973), p. 40.
- (2) Lee R. Edwards, "Jerusalem the Golden: A fable for our times", s" *Women's Studies* 6 (3/1979), p. 333.
- (3) マーガレット・ドラブル, 小野寺健訳『黄金のイエルサレム』(河出書房, 1982)のうちの訳者「解説」 p. 274.
- (4) 小野寺訳, p.32. Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden* (1967; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1979), p. 27.
- (5) 同訳, p. 74. *Ibid.*, p. 58.
- (6) Nancy S. Hardin, "An Interview with Margaret Drabble", *Contemporary Literature*, Vol. 14, No.3(Summer 1973), p. 279.
- (7) *Jerusalem the Golden*, p. 32.
- (8) *Ibid.*
- (9) 小野寺訳, p. 146. *Ibid.*, p. 111.
- (10) 同訳, p. 272. *Ibid.*, p. 206.
- (11) 同訳, 同頁. *Ibid.*
- (12) Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures* (London and Basingstoke; Macmillan, 1980), p. 39.
- (13) *Ibid.*
- (14) Susanna Roxman, *Guilt and Glory: Studies in Margaret Drabble's Novels 1963 - 80* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1984), p. 73.
- (15) *Ibid.*
- (16) E. C. Rose, p. 40.
- (17) *Ibid.*, p. 41.
- (18) *Jerusalem the Golden*, p. 82.
- (19) *Ibid.*, p. 27.
- (20) 小野寺訳, p. 167. *Jerusalem the Golden*, p. 82.
- (21) 同訳, 同頁. *Ibid.*
- (22) 同訳, p. 173. *Ibid.*, p. 131.
- (23) 同訳, p. 218. *Ibid.*, p. 165.
- (24) *Ibid.*, p. 196.
- (25) *Ibid.*
- (26) 小野寺訳, p. 257. *Ibid.*, p. 196.
- (27) 同訳, p. 262. *Ibid.*, p. 199.
- (28) 同訳, p. 270. *Ibid.*, p. 205.
- (29) E. C. Rose, p. 52.

③① Marion Vlastos Libby, "Fate and Feminism in the Novels of Margaret Drabble", *Contemporary Literature*, Vol. 16, No. 2(Spring, 1975), p. 176.

③② Mark Hurley Moran, Margaret Drabble: Existing within Structures (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Univ. Press, 1983), p. 18.

③③ Drabbleは、このインタビューで次のように語っている。

'... You're just completely at the mercy of fate. It's planned but accidental in some peculiar way..... I think that accidents do happen and that what has appalled me about the world is that some people have good luck. They meet the right person. Some people look forever and they try and they do their best to find God or a lover or a husband and never do. The lucky ones get it. Those that wait sometimes get it and sometimes don't.

I'm kind of Greek with a Greek view of the gods, I think. I mean, better keep on the right side of them because although they're not very nice, they're exceedingly powerful. One had better appreciate it; (pp. 283 - 284.)

③④ マーガレット・ドラブル, 鈴木建三訳『滝』(晶文社, 1979), p. 7. Margaret Drabble, *The Waterfall* (1969; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1979), p. 7.

③⑤ 鈴木訳, p. 100. *Ibid.*, p. 89.

③⑥ 同訳, p. 55. *Ibid.*, pp. 49 - 50.

③⑦ Margaret Drabble, *A Summer Bird-Cage* (1963; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1980), p. 192.

③⑧ 小野寺訳, p. 91. *Jerusalem the Golden*, p. 70.

③⑨ *Jerusalem the Golden*, p. 70.

④① *Ibid.*, p. 204.

④② Margaret Drabble, *The Millstone* (1965; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1980), p. 5.

④③ *Ibid.*, pp. 17 - 18.

④④ *Ibid.*, p. 162.

④⑤ *Ibid.*, p. 172.

④⑥ *Ibid.*

④⑦ *Ibid.*

④⑧ E. C. Rose, pp. 18 - 19.

④⑨ *Ibid.*, p. 19.

④⑩ *Ibid.*, p. 21.

④⑪ *Ibid.*, p. 23.

④⑫ Margaret Drabble, *The Tradition of Women's Fiction: Lectures in Japan*, ed. by Yukako Suga(Tokyo: Oxford Univ. Press, 1982), pp. 1 - 18.

④⑬ *Ibid.*, p. 14.

④⑭ *Ibid.*, pp. 16 - 17.

④⑮ Margaret Drabble, *The Middle Ground* (1980; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1982), p. 270.

⑤④ N. S. Hardin, "An Interview with Margaret Drabble", p. 278.

⑤⑤ Ibid., p. 275.

本論文は、第37回日本英文学会・九州支部大会（1984年，11月23日，活水女子大学）における口頭発表「*Jerusalem the Golden* 研究—— Clara の生き方を通して見る Margaret Drabble の女性観 ——」に基づくものである。